

国際活動と外国語会話力

日本人は英会話力が弱いと言われている。確かに国際会議などで日本人の質問するケースは少ないように思われる。外国人との委員会でもあまり発言しないように思われる。しかし、これは下手な英語では恥ずかしいとか、何度も聞き返すのはいやだとの意識からではなからうか。日本の若者が世界を単独横断するケースがあるが、通過する数十カ国の言葉を話せるとは思われないから体当たりで突破しているのであろう。国際会議でも恥ずかしいと思わずに理解できるまで聞き返し、場合によっては黒板に書いても貰えば良い。

明治維新直後、岩倉具視等が欧米視察を行った。伊藤博文、木戸孝允、大久保利通など明治政府の中心人物達である。明治4年11月横浜を出港し米国のサンフランシスコに到着。列車で米大陸を横断しボストンから渡海しロンドン、パリ、ベルリン、サントペテルベルグ、デンマーク、スウェーデン、イタリア、ウィーン、ジュネーヴと世界中を駆け巡っている。各地で演説を行い、多くの家庭に招待されて懇談した。彼らの語学力は、さほどでは無かったであろうが、堂々とした態度と交流は、彼の地の人々に高く評価されたと当地の新聞などに記録されている。

さらに驚くべきことは、視察団の行く先々でかならず日本人が現れたことである。各藩から外国に留学派遣されていた若者達である。幕末から明治維新の動乱期に若者を派遣した藩の上層部の人々も立派であるが、英語圏やオランダ語圏以外でも頑張っていた当時の若者の努力には感激する。このことを思えば、国際会議で黒板に書いてもらうなどは、とるに足らない苦勞である。

私は1987年米国のケンブリッジ市(ボストンの川向こうでMITやハーバード大学のある町)に研究開発オフィスを構えた。到着直後に風邪を引き薬局に風邪薬を買いに行った。料金を払う時にレジで「ノーバック?」と聞かれて立ち往生した。何度聞き返しても「ノーバック?」である。結局相手の言わんとすることが「小さな風邪薬のビンなので袋はいらないね(NO BAG?)」と理解できたのは暫くしてからであった。会話や交流は互いに正しい言葉・文章を話せなければ成立しないと言うものではない。意思を通じさせようとする気持ちや態度があれば成立するものと思う。

ケンブリッジ市の私のオフィスのメンバーはパキスタン人、黒人、ユダヤ人、フィンランド系米国人、WASPと称される米国人、それに我々日本人と多彩であった。それでも大変チームワークの良いオフィスであった。各国なまりの米語で仕事は確実に推進された。宗教や言葉の壁を乗り越えて一緒に仕事するには違いを認め、受け入れることから始まる。国籍・宗教・言葉が違って、相手を思いやり、相手を受け入れ、互いの違いを受け入れれば、何時でも、何処でも、どのような国籍の人とも会話が出来、仕事が出来ると信じている。国際性とはこのようなことを言うのではなからうか。

2004年9月

清水建設株式会社

常務執行役員 技術研究所長

工学博士 藤 盛 紀 明